

法に抗する制度

ドゥルーズとサン＝ジュスト

山下 雄大

ロベスピエールと並ぶモンターニュ派の指導者として大革命期フランスに独裁と恐怖政治をもたらした「死の大天使」(ミシュレ)ことサン＝ジュストは、短いながらも波乱に満ちたその生涯や虚実入り混じったエピソードも相まって、歴史家だけでなく作家や哲学者からも広く関心を集める存在となっている。とりわけ同時代人サドとの比較は戦後フランスに見られた特筆すべき傾向であり、マルロー、プランショ、ラカンといった名だたる文筆家のモチーフとなったことはよく知られている¹⁾。このような背景も影響してか、『フランスの革命と憲法』等の著作や草稿を書き遺し、「ジャコバン主義の最大の理論家」²⁾とも評されるサン＝ジュストの政治哲学に正面から取り組んだ研究者は、草稿研究に多大なる貢献を果たしたアルベール・ソブール³⁾、全集の編者を務めたミゲル・アバンスールを除けばあまりに少ない。この現状を踏まえるならば、若き日のジル・ドゥルーズがサン＝ジュストを論じている事実は検討に値すると言えらる。後に20世紀フランスを代表する哲学者のひとりとして名を馳せるドゥルーズは、いかなる角度からサン＝ジュストに光を当てたのだろうか。

1953年にドゥルーズが編纂したアンソロジーの『本能と制度』⁴⁾には、サン＝ジュストの遺稿である『共和国の制度』⁵⁾の一節が収録されている。サン＝ジュストが18世紀フランスを代表する政治哲学者であるモンテスキュー⁶⁾やルソーに名を連ねる一見奇妙なテキスト選定の意図を探るには、当時のドゥルーズの関心の所在に目を向けなければならない。1990年にアントニオ・ネグリを聞き手として行なわれたインタビューで述べられている、「制度(institution)」と「法(loi)」の問題がそれである⁷⁾。『本能と制度』と同年に刊行された処女作『経験論と主体性』において、17世紀の政治哲学の鍵概念として広く用いられた社会契約を批判したヒュームの先見性を称えつつ、ドゥルーズは「社会の本質

は法ではなく制度である」⁸⁾と述べ、社会が形成される契機についての両者の差異に着目する。社会契約説は人間の「利己心(égoïsme)」から出発し、生来の自然権を譲渡して共通の権力を制定することによって人間は「各人の各人に対する戦争状態」(ホブズ)である自然状態から社会状態へと移行すると想定する。これに対して、ヒュームの端緒となるのは人間の「共感(sympathie)」である。家族や友人といった身近な人々に偏りがちなこの共感を「合意(convention)」に基づいた制度によって統合すること、これこそがドゥルーズがヒュームの読解を通じて発見した構想なのである⁹⁾。ドゥルーズは制度を「法のような制限ではなく、むしろ反対に行動のモデルであり、真の企てであり、肯定的な手段によって考案されたシステムであり、間接的な手段による肯定的な考案である」¹⁰⁾と定義し、ヒュームが社会を「否定的なもの(le négatif)」ではなく「肯定的なもの(le positif)」として理解した点を評価する。1972年に発表した論文「ヒューム」では、「おそらくヒュームは18世紀の社会学を依然として支配していた契約と法の制限的モデルと手を切った最初の人物」であって、その目的は「この制限的モデルに人為と制度の肯定的モデルを対抗させる」¹¹⁾ことだと指摘している。

このようなドゥルーズの制度論において、とりわけ重視されるのはサン＝ジュストが『共和国の制度』で展開する以下の政体論である。

法はあまりにも多く存在するが、市民の制度はあまりにもわずかしが存在していない。われわれはそれを二つか三つしか有していないのである。アテネやローマでは、多くの制度が存在していた。制度が多く存在すればするほど、人民は自由であるとわたしは考える。君主政にはわずかな制度しか存在せず、絶対的な専制(despotisme absolu)にはなおのこ

見いだされるのであって、制度がより多く存在すればするほど衰えるのだ¹²⁾。

統治者の人数を基準とする古典的な政体論とは異なり、ここでサン＝ジュストは制度と法の多寡によって政体を分類している。これはきわめて独創的な手法であって、基本的にはプラトンやアリストテレスに依拠しつつも君主政と専制の区別を法に基づいた統治か否かに求めたモンテスキュー¹³⁾や、政務官(magistrat)の人数を基準としたルソー¹⁴⁾といった、革命家たちの思想的源泉とされる理論とも一線を画している。ドゥルーズはこの発想を自身の制度論にも取り入れており、『本能と制度』の序文では制度と法の差異から導き出される政治的基準として「僭主政(tyrannie)とは多くの法とわずかな制度が存在する政体であり、民主政とは多くの制度ときわめてわずかな法が存在する政体である」¹⁵⁾と述べている。さらに、マゾッホの「契約」とサドの「制度」の特異性に重きを置いた1967年の『ザッヘル＝マゾッホ紹介』では、「サン＝ジュストは多くの制度ときわめてわずかな法を要求するとともに、法が制度より優位に立つかぎりには共和国では依然として何もなされていないと主張する」¹⁶⁾と論じ、これこそが『共和国の制度』の主たるテーゼだと位置づける。ここでドゥルーズが強調するのは、サン＝ジュストにおける制度と法の排他的な関係である。

サン＝ジュストはいみじくも反比例の関係(relation inverse)を指摘したのである。すなわち、法が多ければ多いほど制度は少なくなり(君主政と専制)、制度が多ければ多いほど法はより少なくなる(共和政)¹⁷⁾。

上記の引用には『経験論と主体性』以来ドゥルーズが追求してきた制度と法の対立の構図がはっきりと表れている。ドゥルーズにとってのサン＝ジュストとは、ヒュームとともに「契約と法による制限的モデル」を反駁し、「人為と制度の肯定的モデル」を掲げた稀有な思想家なのである。

ところが、サン＝ジュストを介することにより、『経験論と主体性』では簡潔な指摘のみがなされていた制度の創設者としての「立法者(législateur)」の存在が前景に浮上する¹⁸⁾。身分

制議会である全国三部会が1614年以降開催されず、国王のみが立法者であると見なされていたフランスでは、「立法府の成員」という意味でこの語が用いられるのは革命の進展に伴う1790年からであり¹⁹、サン＝ジュストを含めた18世紀フランスの政治哲学は古代の制度を打ち立てたモーセやリュクルゴス、ソロンといった伝説的人物を立法者の模範と位置づけている。実際にドゥルーズは、ルソーの『社会契約論』のなかでも難解だとされている第二篇第七章の「立法者について」からの抜粋を『本能と制度』に収めているため、制度における立法者の半ば超人的な役割を意識していたと推察し

うる。かくして、ドゥルーズは制度への問いを深める過程で自身の枠組みを揺るがしかねない難問に直面したのだった。

精神分析の受容や68年5月の衝撃、そして盟友フェリックス・ガタリとの出会いを経て、ドゥルーズの関心は政治へと移行したため²⁰、この課題は手つかずのまま残されてしまった。しかしながら、「ドゥルーズ固有の政治哲学」に該当する初期ドゥルーズの制度論は、その射程の広さゆえにサン＝ジュストの政治哲学を考える上での出発点となりうる新たな視座を提供しているのである。

¹ このようなサン＝ジュスト研究の潮流とその問題点に関しては以下に詳しい。Miguel Abensour, « Lire Saint-Just », Antoine-Louis de Saint-Just, *Œuvres complètes*, édition établie et présentée par Anne Kupiec et Miguel Abensour, Paris, Gallimard, 2004, p. 9–25.

² 柴田三千雄『バブーフの陰謀』岩波書店、1968年、248ページ。

³ 以下のサン＝ジュスト論はソブールが偽名を用いて執筆したと見なされている。Albert Soboul (sous le pseudonyme de Pierre Derocles), *Saint-Just. Ses idées politiques et sociales*, Paris, Éditions sociales internationales, 1937. なお、上記の著作を含めたソブールの業績に関しては以下を参照されたい。Françoise Brunel, « Bibliographie de l'œuvre d'Albert Soboul », Albert Soboul, *La Révolution française*, Paris, Gallimard, 1982, p. 15–41.

⁴ Gilles Deleuze (éd.), *Instincts et institutions*, Paris, Hachette, 1953. ドゥルーズが執筆した序文は以下の著作に再録されており、本稿での引用はそれに依拠する。Gilles Deleuze, « Instincts et institutions », *L'île déserte. Textes et entretiens 1953–1974*, édition préparée par David Lapou-

jade, Paris, Minuit, 2002, p. 24–27.

⁵ 本稿での『共和国の制度』からの引用はドゥルーズが参照している以下の版に依拠する。Saint-Just, *Institutions républicaines*, *Œuvres de Saint-Just*, introduction de Jean Gratiot, Paris, Éditions de la cité universelle, 1946.

⁶ 正確には、『ブルジョワ精神の起源』や『フランス革命の哲学』で知られるベルナール・グレチュイゼンによるモンテスキュー論が収録されている。Bernard Groethuysen, « Le libéralisme de Montesquieu et la liberté telle que l'entendent les républicains », *Europe*, n° 37, janvier 1949, p. 2–16.

⁷ Gilles Deleuze, « Contrôle et devenir », *Pourparlers 1972–1990* [1990], Paris, Minuit, coll. « Reprise », 2003, p. 229–230.

⁸ Gilles Deleuze, *Empirisme et subjectivité. Essai sur la nature humaine selon Hume*, Paris, PUF, 1953, p. 35.

⁹ ヒューム自身は制度と法を明示的に対比していない点には注意が必要である。研究対象の言外の主張を探るドゥルーズの哲学史研究のアプローチに関しては以下を参照されたい。Gilles Deleuze, « Sur la philosophie », *Pour-*

parlers, *op. cit.*, p. 186.

¹⁰ Deleuze, *Empirisme et subjectivité*, *op. cit.*, p. 35.

¹¹ Gilles Deleuze, « Hume », *L'île déserte*, *op. cit.*, p. 233.

¹² Saint-Just, *Institutions républicaines*, *op. cit.*, p. 289.

¹³ Montesquieu, *De l'esprit des lois*, *Œuvres complètes*, t. II, texte présenté et annoté par Roger Caillois, Paris, Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 1951, p. 239.

¹⁴ Jean-Jacques Rousseau, *Du contrat social*, texte établi, présenté et annoté par Robert Derathé, Paris, Gallimard, coll. « Folio essais », 1964, p. 222–224.

¹⁵ Deleuze, « Instincts et institutions », *op. cit.*, p. 25.

¹⁶ Gilles Deleuze, *Présentation de Sacher-Masoch. Le froid et le cruel* [1967], Paris, Minuit, coll. « Reprise », 2007, p. 68. 強調原文。

¹⁷ *Ibid.*, p. 69.

¹⁸ Deleuze, *Empirisme et subjectivité*, *op. cit.*, p. 36.

¹⁹ Alain Ray (dir.), *Dictionnaire historique de la langue française* [1998], t. II, Paris, Le Robert, 2006, p. 1999.

²⁰ Deleuze, « Contrôle et devenir », *op. cit.*, p. 230.